

辛亥革命100年

孫文支えた日本人・梅屋庄吉

ことしは辛亥革命からちょうど100年。革命にまい進する孫文を終生支援し続けた日本人がいる。その人物は梅屋庄吉。梅屋の曾孫で、レストラン「日比谷松本楼」常務取締役の小坂文乃さん(43)は、辛亥革命



100周年に合わせて梅屋の知られざる実像を著書「革命をプロデュースした日本人」(講談社、1785円)にまとめた。「アジアの平和を願った、スケールの大きい日本人がいたことを知ってほしい」と話している。

ひ孫が実像を本に

「日比谷松本楼」の小坂文乃さん



梅屋庄吉は、1868年長崎生まれ。貿易や映画産業などで幅広く活躍した実業家だ。梅屋が香港で写真館を経営していた1895年、店に出入りしていた英国人から紹介され、孫文との運命的な出会いを果たす。

「君は兵を挙げたまえ。我は財を挙げて支援す」。国を憂える孫文と意気投合した梅屋は、生涯にわたって孫文を財政的に支援することを誓う。実際に梅屋はその後、孫文の日本亡命中はおろか孫文が亡くなるまで援助し続けた。

「梅屋は、日本の映画産業の草創期に深く関わった。映画界の風雲児」でした。莫大(ぼくだい)なお金を稼ぎましたが、同時に莫大なお金を革命のために出費したので、ひ孫の私からみたら格好いおじいちゃんです」と小坂さん。

その一方で「梅屋と孫文のつながりがあり知られていないのは、『一切口外シテハナラズ』という梅屋の遺言があったからだと思います」と語る。孫文からの手紙や、孫文と一緒に撮った写真など多くの史料が残されているが、遺言を守り続けた親族が史料を公表したのは日中の国交が回復して以降だ。

小坂さんは現在、講演などを通じて、精力的に梅屋庄吉の紹介に努めている。2008年に中国・胡錦濤国家主席が来日した際には、小坂さん自身が孫文と梅屋の関係を説明した。また、小坂さんが所蔵する史料に興味をもった福田康夫元首相からは「本を書いてください」と言われたことも。小坂さんの勤める日比谷松本楼も梅屋や孫文とゆかりが深い。梅屋が日本亡命中の孫文をたびたび宴席に招待した記録が残る。同所には「孫文夫人ゆかりのピアノ」などの品々も展示されている。小坂さんは話す。「開けてもいない史料がまだまだありますし、孫文と宋家の三姉妹の次女・宋慶齡との恋愛などすてきな話もあります。皆さまに梅屋庄吉のことをもっと知っていただければと願っています」

中国の上海孫中山故居記念館内にある「孫文と梅屋庄吉研究センター」で顧問も務める小坂さん。「梅屋は孫文にお金は出しても口は出さない。美学を貫いた人だと思います」



小坂さんの講演情報や梅屋庄吉に関する問い合わせは日比谷松本楼・吉田 03・3503・1451